業 界 短 信

（２１年４月１日～５月３１日）

旭鋼材工業、新型レーザ導入（鉄鋼新聞、４／３）

旭鋼材工業㈱（宮崎県延岡市、田中紀典社長）は、このほど新型レーザ（４ＫＷ）を導入し、１日ぁら稼働を開始した。加工精度と生産性の向上が狙いで、生産の能力は従来に比べ３０％アップした。最大板厚は２２ﾐﾘで、ステンレス材は１０ﾐﾘまで可能。同社は、H形鋼やアングル、チャネル、ガス管、鋼板類を在庫する一方、今回のレーザのほかに、プラズマ１基、ＮＣガス３基、シャー２基、大型プレス１基を保有している。トータルの月間切断量は現在約２８０トン。

大鹿シャーリング、レーザ加工を内製化（産業新聞、４／６）

㈱大鹿シャーリング工業所（名古屋市中川区、大鹿功雄社長）は、本社工場にレーザ１基を導入し、レーザによる内製加工を開始した。切断制度や加工効率、製品歩留まりの向上とともに、新規需要への対応と併せ、形切り能力の強化を図るのが狙い。今後は全体加工量に占めるレーザ比率を２０％程度まで高めたい考え。導入機種の出力は 2.5 ＫＷで、切断定磐サイズは幅３メートル×長さ 4.5 メートル。板厚は最大１２ﾐﾘ程度まで活用する。レーザの新設により、本社工場の切断設備はＮＣガス、プラズマ、シャーの４タイプとなり、加工バリエーションが拡大。同社は、本社工場と半田工場の２工場を持ち、切断加工のほか、曲げ、穴あけ、ショット、開先、マシニング加工など厚板の一貫加工がこのウナ体制を構築している。月間加工能力は全体で約 1200 万ﾄﾝ。

飯塚鉄鋼、新倉庫４月に着工（産業新聞、４／６）

㈱飯塚鉄鋼（兵庫県姫路市、岩城正治社長）は、５月に新倉庫の建設に着手する。投下金額は１億３０００万円（建設費と土地取得費用の合計）で、完成は６月ごろの予定。保管能力は 2000-3000 ﾄﾝ。香西センターの条項類胃を移管し在庫する方針だが、異動後は空きスペースに切る板の設備を増設する方向で検討する。同社は表土建愛の大手鋼材販売・加工業者で、主力事業は切る板。ここ２-３年は工場建屋を増強するとともに、最新鋭の切る板設備の増設、さらに鋼板用の開先など二次加工の増強を進めてきた。新倉庫の建設面積は 500 平方ﾒｰﾄﾙ、建設費用は約 7000 万円。

アカシ、初の社債１億円発行（産業新聞、４／６）

アカシ㈱（愛知県高浜市、加藤純也社長）は、３月２６日付けで、１億円の第１回無担保社債を発行した。景気動向が不透明感を増す中、事業資金を厚く確保するとともに、仕入先に対する信用力の向上を図ることが目的。同時に企業案内パンフレットや会社ロゴマークも新規作成し、社債発行と合わせ企業イメージの向上につなげていく考え。。

シーヤリング工場、老朽化対策に重点投資（鉄鋼新聞、４／８）

㈱シーヤリング工場（堺市西区、永吉明彦社長）は、今年度設備投資について、受電設備の更新など、老朽化対策を中心に実施する。また、今年秋完成予定で、旧建材工場で熱処理炉やレベラーなど高級厚板精製設備の導入が進められているが、稼働による消費電力増への対応も図る。総投資額は約７千万円。鉄鋼需要の急減に伴い、厚板溶断業者の稼働率は大幅に低下しており、とくに建産機メーカーなど製造業向けの販売減は大きい。同社はここ数年、産機メーカー向けの販売増を目指し、０８年度上期には月産1600㌧にまで増加していた。しかし昨年末から急減し、今年４月は200㌧にまで減少する見通し。

山崎シャーリング、コスト減で赤字縮小（産業新聞、４／１０）

㈱山崎シャーリング（大阪市西淀川区、山崎光信社長）は、全社レベルの切板数量の減少に対応し、不況対策を強化している。２月から役員の報酬カットを実施するとともに、４月からの従業員の定昇を凍結した。５月から雇用調整助成金の給付に伴い、一時休業を検討している。また、安値受注の回避とコスト低減の徹底を図る。今期（2009年７月）の業績は赤字を見込んでいるが、一連の取り組みにより赤字幅を縮小させる。全社ベースの切板数量は約2000㌧だが、昨年１２月は通常比３％減、１月が１０％減、２～３月は３５％減と月を追うごとに悪化。なお、同社は本社工場にＮＣガス４基、プラズマ１基、レーザ２基、開先ロボット１基、姫路工場にフレームプレーナー２基、レーザ１基、開先ロボット２基を持ち、主に橋梁、造船、車両向けに切板を行っている。

門倉剪断工業、中間工場が本格稼働（産業新聞、４／２１）

㈱門倉剪断工業（福岡県鞍手郡、白水正幸社長）はこのほど、同社８番目の工場となる中間工場の本格稼働に入った。同工場は有効切断幅2450㍉、板厚６～１００㍉が加工できる大型ガス切断機３台を設置。高速性と高精度切断を武器に短納期対応などの切板加工を行う。月間加工能力は800-1000トンで、現在400㌧の加工を行っている。工場の敷地面積は１万2210平方㍍。主な設備は54㍍のレールにＮＣガス３基を搭載。このほかにポータブル２基を備える。特にＮＣガスは切断板厚能力200㍉で、有効切断幅2450㍉まで可能で、縦・横方向ともにフックピニオン駆動方式により高精度切断を行うほか、高速加工に優れる。同社はベース・シャーをはじめ、極厚精密熔断、特殊鋼板（ＳＢ、ＳＣ，ＳＣＢ）、高張力鋼、耐摩耗鋼、耐硫酸鋼、クラッド鋼、ステンレスなど、各種加工を幅広く手掛けている。

インスメタル、「北海道ＣＡＤセンター」本稼働（鉄鋼新聞、４／２２）

㈱インスメタル（千葉県浦安市、福井英人社長）は、ＮＣ加工用データ作成専門の「北海道ＣＡＤセンター」が完成し、４月１６日から業務を開始した。同社は、レーザ８基と折り曲げ加工機といったＮＣ設備を保有。客先から送られる加工図面をもとに、ＮＣ設備を稼働させるための指示情報を作成するが、設備台数の増加と多岐にわたる加工ニ

ーズに対し、ＣＡＤデータ作成能力が追い付かずにいた。標茶にＣＡＤ室と管理厚生棟を建設したことにより、浦安、八街と合わせ３拠点でＣＡＤデータ作成を行うことになる。

シーヤリング工場、厚板用精整設備、１０月稼働（鉄鋼新聞、４／２３）

㈱シーヤリング工場（堺市西区、永吉明彦社長）が進める熱処理炉、レベラーなど高級厚板用精製設備の建設工事は順調に進展、８月上旬に観光、１０月に営業運転を開始する。厚板溶断業としては下記的となる新設備の稼働に向けて着々と準備を進めている。新設備の処理能力は月 2500 トン、板厚は 6-22 ミリ、板幅は 2500m、板長は 14 メートル。

門倉剪断・門倉会長、九州・山口経営者賞受賞(産業新聞、４／２８）

九州・山口地域経済貢献者顕彰財団は２３日、第３６回経営者賞表彰式を行った。門倉治･㈱門倉剪断工業会長をはじめ３名が受賞した。表彰式では門倉会長らが紹介され、受賞理由などが披露された。また、橘高公久・九州経済産業局長が祝辞を述べた。

JFE 鋼材、コスト削減を徹底（鉄鋼新聞、５／７）

JFE 鋼材㈱（東京都中央区、吉里勉社長）は、需要環境の変化で受注量が落ち込んでも収益を確保できるようコスト構造を見直す。主力の厚板溶断部門では設備投資を一時凍結したほか、外注費、輸送費、修繕費などを徹底して抑制。併せて生産性や歩留まりの向上、在庫調整なども強力に推し進める。昨秋来の景気後退で主力の建材向け、及びトラックフレーム向けの受注量低下は必至。０９年度は厚板部門で前年度実績見込み比２０％減、レベラー部門で同３０％減を余儀なくされ見通しにある。同社は０８年度業績で統合以来最高収益を上げる見込みであるが、数量依存型の収益体質のままでは赤字が避けられない状況だ。好調な船舶部門と合わせ、０９年度は、大幅な減益になるものの黒字維持を目指す。

マルキンサトー、今期目標売上５８億円（鉄鋼新聞、５／１１）

㈱マルキンサトー（札幌市、佐藤隆社長）は、今期、売上高５８億円、経常利益１億円を目標に、顧客満足度と社内満足度の向上を図る方針だ。具体的にはチームワーク向上のための、業務改善の推進、ミスゼロを目指した全体研修の実施。品質向上、コストダウン、納期の厳格化など、技術面や検査体制の徹底などを含め、原点に戻った施策で競争力強化を図る。

また、同社は石狩事業所第一工場で、NC ガス切断機を１基更新する。切断可能板厚は 6～50 ミリで、５月末までに本格稼働を開始する予定。

九州興機、最新鋭レーザ導入（産業新聞、５／１８）

九州興機㈱（北九州市八幡西区、定行淳社長）はこのほど、中期３年計画を前倒しし、設備投資を行った。最新鋭レーザの導入をはじめ、NC ガスのリプレース、2.8 トンの片

門型クレーンの設置など総投資額は 9000 万円に上る。すでにレーザは 24 時間操業に入るなど本格稼働しており、精密加工及び小ロット、短納期対応が強化されるなど威力を発揮している。同社の板の扱い量は月間 2300 ﾄﾝで、うち販売が 1700 ﾄﾝ、切板加工が 600 ﾄﾝ。切板の加工範囲は 1.6～170 ﾐﾘでベースが中心。設備は、本社工場はプラズマ１基、レーザ１基、NC ガス３基、開先１基、シャーリングマシン１基。長崎営業所は NC ガス２基。